フェザーストン事件

（Featherston Incident）

森　島　　覚
追手門学院大学

は　じ　め　に

1．戦没者記念公園（捕虜収容所跡地）内にある有名な「夏草や　つはものどもが　夢の跡」と彫られた記念碑

2．戦没者記念公園（Japanese Garden とも称されている）前をはしる道路

いわゆる日本の戦記物の太平洋戦争と称する部門で，ガダルカナル決戦は非常に有名である．しかしながら，同じく大洋州における地域での日本人捕虜の脱走・暴動事件については殆ど明らかにされてこなかった．これだけみても，一般的な意味での日本人のかつての戦争への反省やその責任問題の本質に対する態度が垣間見える．さて，21 世紀も 10 年近く経過しようとする今日に至って，さすがに戦後史の中で現実との繋がりが薄くなくなってきたということで，ようやく日本でオーストラリアのカウラ事件が認知された（2008 年 7 月 9 日に日本 TV 系でドラマとして全国に流されたという意味において，尚オーストラリアにおいてこのテーマは既にその四半世紀近く前にドラマ化され放映された）．

ところで，その 1 年前 2007 年 8 月 1 付のニュージーランド・ウェリントン現地の新聞に 7 月 31 日にガダルカナル決戦の関係者やその親族がフェザーストンを訪れた，という記事が掲載された．ここでカウラ事件でもそうであるが，突如フェザース

トンを持ち出すこと自体が唐突である．そのことを承知のうえで，できうれば日本においてその唐突が少しでもなくなることを願い，以下フェザーストン事件について紹介していく．日本におけるオーストラリア・ニュージーランドの研究者としてこれを明らかにすることで「戦後」が終わるのではないかという意味を込めて（いうまでもなく次の戦争はあってはならない）．カウラ事件の扱い方の変化をみてそのことを一層感じるようになったからである．

フェザーストン事件とは

まず，フェザーストンの場所からはじめることにする．フェザーストンはニュージーランドの北島にあり首都ウエリントンの郊外 100 km も行かない，ワイララパ（WAIRARAPA）湖の北東部に位置する．典型的なニュージーランドの農村地域の中のタウンという風情を備えた土地である．ウエリントンから自動車で行くのが最も便利と思われるが，公共交通機関として国会議事堂そばのウエリントン駅から出るトランツメトロ・ワイララパ線のマスタートン行きに乗り途中のフェザーストン駅で降りるという方法もある．

＊　＊　＊　＊　＊

当地の歴史博物館発行（2006 年 12 月現在）のリーフレットでは，フェザーストン事件（Featherston Incident）は，日本人捕虜収容所の箇所において「800 人規模の日本人捕虜収容所が 1942 年に設営され，1946 年に捕虜は送還された．当博物館では，1943 年の『フェザーストン事件（Featherston Incident）』といわれる日本人捕虜の暴動に関する情報・資料だけではなく収容当時の日常生活写真や創作品などの品々が展示されている」と，説明されるにとどまっている．

これだけでは，戦時中の 1943 年に捕虜となった日本人が，当時敵国であったニュージーランドの地で暴動を起こしたことしかわからない．

そこで，少し詳しい概要を述べておくと，以下のようである．

その前に，第二次世界大戦参戦に当たって，直接かつ主要な相手国であるアメリカに対しての日本における認識（今日まで明らかになった限りにおいての通説）は，アメリカは生産力さらに軍事力において世界屈指であるが，戦争体制に入っての総合的な国力は（戦争が本格化すればするほど）日本のほうが耐え抜く力を持っている，という極めて主観主義的なものであった．さらに，日本の軍部の事情はというと，陸軍と海軍の対立は有名であり主導権を持っていた陸軍の中枢になればなるほどアメリカに対する情報・認識も粗雑なものであった．また日本の軍隊内における陸軍と海軍相互の意思疎通が欠けていたことはつとに有名であり，当然情報の共有もなされていなかった．その最初の反映がガダルカナル（広くいえば大洋州における戦線）という現場であった，と後知恵であるがいえよう．では，なぜガダルカナルが決戦となったかといえば，日本の戦争戦略における南方資源補給地（路）の確保と

いうことから，軍事力の身の丈に会わない戦線の途方もない拡大をしたからであった．(「カウラ」事件においてもそうであるがこのようなことが事件の伏線としてあるので敢えて触れた．この部分についてはこれ以上立ち入らない．さらなる分析は別の機会に論じることとする．)

フェザーストンという農牧地に軍事施設がつくられたのは，この時の日本人捕虜収容施設がはじめてではなく，第一次世界大戦期の 1916 年（厳密には前年の 8 月に着工される）にニュージーランド陸軍基地が建設され延べ 30,000 人以上の兵士が訓練を受けた．

再び，この地が軍事施設として必要とされるのは，1942 年 8 月のことであり，アメリカからのニュージーランドにおける捕虜収容施設の要望からであった．この頃，戦局が急を告げいわゆる太平洋戦争と表現した場合の分岐点となったガダルカナルを始めとした一連の大洋州決戦で日本の敗退局面がはじまり，大量の捕虜が必然的に生まれることとなったからである，ともいえる．

そこで急ごしらえに，ニュージーランドにおけるフェザーストン捕虜収容所が建設されはやくも同年 11 月には本格的に稼動していくことになる．

そして，事件は 1943 年 2 月 25 日の日中に起きた．ニュージーランド側からすれば，日本人捕虜による暴動事件である．ニュージーランド兵の発砲行動も含め，日本側の死者 48 名，ニュージーランド側の死者 1 名，双方の負傷者は 100 人近くに上るという悲惨なできごととなった（付け加えると犠牲者の中に日本人ではない，いわゆる朝鮮・台湾などで徴兵された人も含まれている)．この事件の原因・理由さらには詳細な事実関係についてまで，今日でも明快になっているとはいえない．

推測を加えた暫定的な事実と結論は，以下のようである．

根本的には戦争がそうさせた，このように結論づけてしまっても，飛躍し過ぎで社会科学的ではない．まず，双方の立場をみておこう．

ニュージーランド側においては，ジュネーブ条約に基づく捕虜の扱い規定を遵守してきたところであるが，戦時下であり捕虜を点呼する時や集団となった時などは当然武装して対応する．日本側においては，本来ジュネーブ条約は国際的なものであり，軍人全員に，当然，周知されていなくてはならなかったものが，軍の最高司令部が「戦陣訓」を徹底させ捕虜の立場自体が存在しないものとしていた．さらに，先に述べたように陸軍と海軍の対立が末端まで浸透しており，戦争そのもののとらえ方に食い違いがあり，どうしても陸軍兵の側が行動の過激さを追求することになっていた．

そこに，偶発的な事態（この事件は施設内における労働の是非が引き金となったとされている．「カウラ」事件の場合は，手狭になった収容所から一部の日本人が他に移送されることの動揺が誘引になった，といわれている）が生じた場合，捕虜の側は近視眼的な行動をとりやすい．初歩的な肉体の物理的衝突，投石行動が考えられる．この程度では，武装してい

るニュージーランド側が威嚇により捕虜を制圧することはそんなに困難なことではない．

しかしながら，この事件の場合ニュージーランド側が武器に装塡しており危機管理において冷静さが欠けていたきらいがあり，不幸にも銃の引き金が放され弾丸が人間に当たったのである．事件の経緯事態が明快になっていないと，先にも述べたように最初の物理的接触を誰が行い第一番目の被害者が誰か，これらも全て灰色なのである．

ともかく，きっかけとしての発砲がなされたあと時間としては短時間ではあったが「暴動」という事態が生じ，50 名近い人命が一瞬のうちに失われるという，のちにフェザーストン事件（Featherston Incident）と呼ばれる戦時中に起きたという意味での二重の悲劇が，ここに生まれた．

フェザーストン事件の概要はここまでであるが，一番大きな問題は未だ明快になっていないこの事件を今後とも風化させないことであり，ありきたりではあるが歴史の教訓としていかなくてはならない，ということである．

そのため「はじめに」で，大見得を切った筆者の研究者としての義務は，この事件の灰色部分を少しでも取り除くことさらに，以下に整理した課題の考察を続けていくことである．これはまた，このノートのむすびともなる．

第一に，寝た子を起こす行為であるかもしれないが，客観的な事実を立体的に検証し歴史として定着させる必要がある．

第二に，この事件が起きた最深の根拠としての戦争そのものの政治・経済学的な解明を深めなくてはならない．

第三に，筆者の研究者としての主題である「労使関係」から人間関係へと考察を深める必要がある，これは社会学・心理学的範疇かもしれない．

以上のことを通して，日本の「戦後」が終わり本質的な社会構造改革がはじめて始まる，と思えるからである．

最後に，貴重な文献として，次のものを上げておく．

Japan and 150 YEARS, 1999, Edited by Roger Peren, New Zealand Centre for Japanese Studies Massey University on behalf of the Ministry of Foreign Affairs, Tokyo
In association with the Historical Branch, Department of Internal Affairs, 1999.
（事件についての政府レベルの公式見解が出ていると理解できる．）

Beyond Death and Dishonour :
One Japanese at War in New Zealand
Michiharu Shinya（Translated by Eric H. Thompson）, Castie Publishing Ltd, 2001.
（当事者の実録で，オリジナルの日本語版を英訳したものである．）

『消えた遺骨』エイミー・ツジモト，芙蓉書房出版，2005 年.

（ノートのかなりの部分で参考にさせて頂いた，また死亡した日本側の遺骨がいまだ所在不明という事実も新しく知った，私の勉強不足を痛感するとともに悲劇の度合いが倍加した.）

3．戦没者記念公園では桜が満開であった（2008 年 9 月）

4．捕虜収容所跡地近辺の放牧地一帯（60 年以上経過した今日の姿）

5．現在のフェザーストン駅

6．フェザーストン駅に到着する（1 日に数本の）定期列車先頭部